

西郷信綱著

古事記の世界



岩波新書

654



西郷信綱著

古事記の世界

岩波新書

zephyrus

notus

西郷信綱

1916年大分県に生まれる

1939年東京大学文学部国文学科卒業

専攻—日本古代文学

現在—法政大学講師

著書—「日本古代文学史改稿版」(岩波全書)

「萬葉私記第一部, 第二部」「詩の発生」

「国学の批判」「日本文学の古典第二版」(共著, 岩波新書)

古事記の世界

岩波新書(青版) 654

1967年9月20日 第1刷発行 ©

1973年9月10日 第8刷発行



著者 さい 郷 のぶ つな
西郷信綱

東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発行者 岩波雄二郎

東京都青梅市根ヶ布1-385

印刷者 白井倉之助

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
一ツ橋 2-5-5

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

序	古事記をどう読むか	1
一	神話の言語	15
二	神話の範疇	30
三	黄泉の国——死者と生者	48
四	須佐之男命——罪の化身	62
五	天の岩屋戸——太陽の復活	78

六	大国主神——出雲世界	91
七	八千矛神——古代歌謡	113
八	天孫降臨——君主の生誕	133
九	日向三代の物語——聖婚	152
十	神武天皇——初代君主	167
結び	古事記の成立をめぐる	188
補注		201
あとがき		213

序 古事記をどう読むか

共存による理解

垣根ごしにその生態をのぞいたり、界限のうわさ話に耳をかたむけるだけでは、物理的に至近距離にいる隣人をだって理解できない。隣人を理解しようとするなら、直接交わりを結び、つきあいを深めることが、何より必要である。作品の理解もまったく同様で、たとえば古事記を理解しようとするには、現代という椅子に腰をおろしたままふり返って眺めるのではなく、古事記の世界に実践的に入りこんで行き、古代人と親しく交わるようにしなければならぬ。ただ、隣人が同じ時代、同じ地域の住人であるのにたいし、古代人は世をへだて、生活においても精神においても凶柄がちがっているから、つきあいといっても、隣人の場合のごとくにはたやすくいかぬのは当然で、むしろそこには後に見るように、いろいろな困難、思いがけぬ障害がまち伏せている。しかし、共存関係を通してのみ相手を理解しうる道がひらかれるという道理は、毫も変わらない。

現代の社会学者や人類学者は、必ずフィールド・ワークに従事する。それもたんなる旅行とか調査とかいうのとは趣がちがって、一定期間——生活の周期を二度くぐる意味で最低期間は二年といわれる——、現地の住民と同じ生活状況を経験し、その言葉を使って対話を日常的にかさねつつ研究を進めるといふことが、理論的訓練とともに必須条件として要請される。フレイザーの『金枝篇』は人類学の名だたる古典で、日本でもひろく読まれているが、今日この本に私たちが不満と退屈をおぼえざるをえないのは、右にいう意味での対話が基礎にならぬおらず、アンケートとか、宣教師や商人の見聞録などにたよって世界各地の風俗習慣の数々を蒐め、それらを十九世紀風の知性主義で体系化したものであることときりはなせない。つまりそこには、かつての大英帝国を偲ばせる茫大な資料がモザイク模様を描かれているが、それは現地の人間たちがそのなかに血脈を以て生きる現実の生活模様とは大して縁がない。彼の学問が「安楽椅子アーム・チェアの人類学」と称されるゆえんである。あなたは、あなたの研究している原始人に会ったことがあるのかと或る人（ウィリアム・ジェイムズ）にきかれたとき、フレイザーが「滅相もない！」と答えた話は有名だが、これはいかにもありそうな話で、彼の学問の性格を一言でいいあらわしたものといえる。⁽¹⁾ここにはたんに研究の手続きや操作の問題ではなく、根底に私たちの生存と主体をまきこんだ方法上の問題がある。そしてこういう方法上、二十世紀を十九世紀からわかたつ何ものかがあるとすれば、それは知性主義があぐらをかいていた「安楽椅子」

に、今日の学問はもはや見きりをつけつつあるという点である。

古代人と の対話

古典研究も、他の時代の文化との交わりであるという意味でフィールド・ワークの一種に擬することが可能であろう。もしそうだとすれば、古事記を真に理解するには、古代人と同じ言葉で対話し、彼らの生活状況をむろん想像的にだが経験できねばならぬことになる。これが口でいうほど容易なことでないのは、充分予想される。明治以来、天皇制国家を聖化する教典にかつぎ出されたせいもあり、一般に古事記をかなり身近かなものを感じる傾向がある。しかしそこには、それだけ観念的なひとり合点、常識的な早呑みこみが種々多いわけで、むしろこれらが古事記の真の理解をさまたげる蔽いになっていると見て過言であるまい。ほとんど制度化しているともいえるこの親近感や自明性をカッコに入れ、もつと根本的に読み直してみようとしてみるがいい。そのとき古事記は、なかなか面白いと同時にきわめてわかりにくく、異様で、挑戦的でさえある作品として私たちの面前にあらわれてくるはずで、黄泉ヨミの国の話、天の岩戸イハドごもりの話、天孫降臨の話等にしても、またスサノヲとは何か、出雲とは何か、あるいは神武天皇とは何かという、そのどれをとっても、みなすこぶる難解な話題であり、それらをわかったかのように思っていたのは実は観念や常識による誤解にすぎず、つまりは理解せずに適当に説明しようとしていたのだということに気づくだろう。ふたたびフィールド・ワークにならっていえば、このとまどいは、およそ見当がついているつもり

で或る原始部落に入った人類学者が、いざとなつてみると言葉もろくに通ぜず、何が何だかわからなくなつたとき感ずるであろう困惑や目まいに似ていなくもない。古事記は、原始的産物ではないけれどもとにかく日本最古の文献であり、いわば日本文化史の最辺境地帯に位する作品である。こういう作品の意味がそうすらすらと解けるはずがない。

あるいは反問するかもしれぬ。古いとはいへ古事記は日本語でかかれた本である、そしてそれを読解するため、すでに幾つかの注釈書ができており、また文法の研究とか辞典類もあるわけ、語義不明の箇所がなお若干あるにせよ、今さらこういうおどしをかけるいわれなど毛頭なく、古代研究に古代語の研究が大事なのは誰しもわきまえた常識にすぎない、と。ところが、それが実は必ずしもそうでないのである。いよいよとなると、注釈書と称されるものが甚だあてにならぬゆえんについてはいづれ具体的にのべる予定だから、ここでは省略にしたがうが、たとえば「葦原」とか「隈クマ」とか、「父」とか「母」とか「産屋」とか、あるいは「天の岩屋戸」とか「天の石位イハクラ」とかいう種類の語が、古事記においていかなる意味を放射しているか、まだほとんど解明されてはいないのである。これは、言葉をその皮膜においてしかとらえず、古代語を知らぬ間に不当に現代語訳しているためである。文法の知識や辞典とかが右にいわゆる古人との対話に大して役だたないことは、幼児が言葉をおぼえていく過程や、私たちが外国語を習得する過程などに徴しても見当がつく。幼児は文法を自覚していないし、また文法をい

くら勉強したからといって外国語が堪能にしゃべれるようになるわけではない。体系としての文法が導入されるのは近代になってからで、それ以前の人々は文法のことにはまだ知らず、文法にたいし無意識であった。が、それにもかかわらず、個人をこえた言語社会があり、そこで人々は言語的に交通しあってきたわけで、この無意識は、文法の問題に還元することのできぬ豊かさや濃度をもつのである。また、たいていの場合、辞典は言葉の意味にかんし、中性的な平均値しかあたえてくれない。成年に達したものなら、ある言葉について辞典にはない用法を心得ているはずだし、とりわけ文学の表現はたえず辞典や文法を追いこすであろう。一般に古典の注釈では、文法的規範や辞典的權威がのさばりすぎており、かかる科学主義が古典の解釈を毒している例は、ほとんど掃いて捨てるほどあるといえる。これは、科学という概念が動詞的に働かずに名詞的に凝固し、研究者が古典の言葉を、絶対的観察者の椅子に坐って、過去の言葉として、あとから見ていることに関連する。そしてそこでは、アシルは永遠に亀の子に追いつかない。対話という水準はしかし、研究者にこうした観察者の椅子から、**現在形**の話す主体 (speaking subject) への**共犯**、からみあいの関係にまで降りてくること、すなわち相手にいうことをきかせるのではなく、そうかといって対象埋没的にこちらが自己を放棄するのでもない相互的な立場に立つよう呼びかける。

私は大して特別なことをいっているわけではなく、江戸時代の伊藤仁斎とか本居宣長とかが

すでに説き、かつ実行したことを、むろんしかるべく修正して現代の次元に生かし直そうとしているにすぎない。⁽²⁾

原始と文明

私たちは、いわゆる原始人またはもっとひろくいって昔の人間の非合理性を強調する反面、現代人の合理性を買いかぶりがちだが、これは一種の驕慢ではなからうか。原始人は狩にかかった獣のごとく生活の恐怖のとりこになり、魔術の行使にあけくればいたわけではなく、たとえば、新石器時代になしとげられたという野生動物の家畜化、野生植物の栽培化の過程——これはいまだに謎につつまれているのだが——を考えてみるだけでも、いかに多くの経験と智慧の蓄積がそこに必要であったか、想像がつくというものである。稲は南方から日本にもってこられたというが、もしそうだとすれば、それがいかにして気候条件の相当ちがうこの国に風土化されたかという点などはもっと注目されていい問題で、少くともたんなる魔術や信仰にたよっているだけでは、これはとうてい可能ではなかっただろう。一般に原始人は、植物や動物や天体や気候等自己の生活環境についておどろくほどくわしい知識を持ち、たとえば毒草と薬草とをはっきり分類し、その使いみちを心得ていると、最近の研究は指摘している。

一方、いわゆる文明人が、実は私たちじしん信じているほど合理性づくめでないことは、自

分の経験を率直に反省してみるか、または二つの大戦をふくむこの半世紀間の世界史の激動をふりかえってみるだけで充分であろう。そしてこれは、人間と歴史が思想や観念とともに身体をもち、しかも両者の関係に一種の曖昧さ、無名の困難が蔵されている事実にもとづくもののようなものである。そのことはしばらくおくとし、学問の方法上の問題としていえるのは——それはフレイザーの、原始の魔術にたいする現代の科学という図式に典型的にあらわれているのだが——、昔と今、原始と文明とを単純に對比させて説明しようとする態度は、さきにいった偽りの親近感と同様、古代研究にとってはもはや無効だということである。そこには対話がなく、前者が後者の論理や観念に一方的に従属せしめられ、それみずからの意味や価値をもたぬ下級のものとして扱われているからで、この考えの下敷になっているのは、後者によって前者が克服されるといふ素朴な進化論に外ならない。

津田左右吉『日本古典の研究』は古事記・日本書紀研究として歴史的価値をもつ著作ではあるが、その基調をなすのはやはり右にいう意味での進化説、または十九世紀風の知性主義である。すなわちそこでは、神話は「思想」のあらわれであり、そして「思想」が神話という不合理で私たちの日常経験に背馳した形をとってあらわれるのは、文化の未発達な、あえていえば無知な時代であったためだということになる。外見は同じでないにしても、これは魔術を擬似科学、誤れる科学と見たフレイザー式の考えと、根本の態度はまったく同じである。この本の

なかで著者は、「後人の追加」とか「潤色」とかの決り文句でいろんな説話をあっさり片づけているが、そして追加や潤色は本文批判上、当然日程にのぼる問題ではあるけれど、それが自己の論理の秩序にぞくさぬさまざまな意味を切りすてるため濫用されているといわざるをえない。果して魔術は誤れる科学であり、神話は幼稚な「思想」であるか。

神話的なもの意味

いかにもマルクスのいった通り、雷神ジュピターは避雷針の出現とともに消えうせる。しかしそこに、教科書的な進化論では片づかぬ、つまりギリシャの芸術がなぜ依然と今日の人間に魅力をあたえつづけるかという精神上の難問があることにもマルクスが注目したのは、よく知られている（経済学批判序説）。原始人の思考と原始的思考、形式としての神話と神話的思考とを区別し、両者を混同しないようにする必要があるのであるまいか。前者が典型的にあらわれるのは、いうまでもなく原始人とか古代人とかにおいてであるが、原始や古代という特定の時代が終わったからといって、後者つまり原始的思考や神話的なものも、跡形もなく人間精神の歴史から消えさるわけではない。子供のものが大人のなかに生きるうに、人間精神にとっても過去は現在の深みまたは余白に保存され、さまざまに姿と化して滅しつづけるわけで、私たちが過去の文化を、たんに論理的に宙でつかむのではなく、自己経験的回路を通して理解できるのも、このためであると思う。

ここに詩人 次のような言葉がある。「詩は裸身にて理論の至り得ぬ境を探る。これ決死の

わざなり」(宮沢賢治)。おそらく「理論」のとどかぬ境、逆にいえば対象化以前の、存在の根ともいふべきもの、さらに詩人の言をかりれば「名辞以前の世界」(中原中也)に踏みこみ、それを汲みとろうとするのは、あらゆる芸術家の心底にひそむ志であり、そこに神話的なものとの秘密な紐帯が生きていることは確実である。とくに、古典的意味での対象というものをためたぬ二十世紀の芸術は、その方法において神話的なものへの接近を示しているとよくいわれるが、これをたんに墮落と決めてかかったのでは、大事な問題を逸することになるだろう。

いちばんさきを歩いているのは、むしろ映像や象徴であり、理論や概念はあとからそれを追っかけたり、引きもとそうしたりしているとさえいえるのではなからうか。少くとも理論と映像、概念と象徴、あるいは科学と神話は、単純な対立関係、前者が後者を進化的に克服するという関係にあるのではなく、もっと複雑な平行関係にあると見るべきであらう。ただ、それらがいかなる形式や秩序において統合されるかは、あくまで歴史的問題である。すなわち、神話的なものは生きつづけるけれど、それが神々の物語としての神話という形式をとってあらわれるのは一回きりであり、社会のまだ文明化しない特定の野蛮段階にかぎられる。

抽象的合理主義
と非合理主義

かつての絶対主義的天皇制から迷信の衣を剥ぎとろうとした津田学の学問的
勇氣は、むろんたたえるべきである。しかし、だからといって一般に神話が
たんに科学によって克服され、とって代られるためにのみあると考えていい

かといえ、決してそうではない。絶対主義は、神話という一回的な形式を永遠化しようとする。それに対抗するには、神話の意味をもみ消すのではなく、神話において獲得された人間的意味の何であるかを積極的にあきらかにする必要がある。さきには、昔の人間の非合理性を強調する反面、現代人は自己の合理性を買いかぶりがちであるといったが、これは非合理的なもの、もしくは神話的なものを、ただちに非合理主義と同一化したがる心性につながる。両者はしかし、もとより次元を異にするのであり、むしろ非合理主義は、人間における非合理的なものに、それに固有な意味や位置をあたえることを知らぬ、つまり経験や生の世界からではなく原理から出発する抽象的な合理主義への反撥として噴出する場合が多い。日本もそうだが、社会的・経済的不均衡がいちじるしく、経験の世界が烈しくゆれうごき混沌たる曖昧さを蔵している国では、とりわけこの抽象的合理主義と非合理主義、今の主題にそくしていえば神話の《克服》と《復活》とが、歴史の奸策でもあるかのごとく意地悪い循環をくりかえす。抽象的合理主義は、理性を抽象的にしか考えていない意味で、それじしん一種の非合理主義であるといえなくもない。このいたちごっこを出しぬくには、人間における非合理的ものの固有な意味を認め、その野放し状態を馴いならすとともに、一方、抽象的合理主義から理性を救い出し、理性を実践的な活物たらしめることが要求されるのではあるまいか。学問にしても、昔と今の双方において合理と非合理がいかに構造化されているかを追求すべきであって、それを単純に進化論的に対

極させて満足すべきではあるまい。

ところで、神話は、もろ刃のやいばである。神話的なものは芸術創造の根底に生きるとともに、またしばしば政治の世界でも再生産される。それは高貴な野蛮と残忍な野蛮との二重性であるといってもいい。だが、ナチズムや天皇制ファシズムの拠りどころとした、いわゆる二十世紀の神話は、現代政治の作り出した、国家または人種についての神話であって、古代の神話に動機づけられてはいても、それとは構造や機能を異にする新しい代用神話であった。資本主義や民主主義についてもこの代用神話がありうるし、現にそういう名をつけた本も出ている。しかし少くとも古事記を読むにさいしては、本来の神話とこの代用神話とをはっきり区別してかからねばならない。しあげとして政治的であるのをさまたげないにしても、とにかく前者は古代人によって生きられ経験された神話であるのにたいし、後者は上から手段的に捏造され、生存というよりは主として意識のレベルを規制しようとした理念体系であるからだ。

神話への眼な ざしの転換

いずれにせよ、神話への、あるいは古事記への眼なざしの方向とでもいうべきものを交えるべきときに来ていると思う。そしてそれには、神話や古事記のまわりに張りめぐらされてきているさまざまな知的因襲や習俗の蔽いをとりのけ、人間の生にとって神話とは何かという根源的な問いを問わねばならない。前にいったように古事記が一つの異様な、だが古代人によって経験された、独自の意味を有する世界として現前す

るのは、この根源的な問いを通してである。そのとき、魔術的祭式はもはや誤れる科学ではなく、それみずからの意味をになう生活表現の劇であり、神話もたんに子供っぽい未熟な「思想」ではなく、祭式と微妙にからみあった、そしてむしろ「思想」以前にぞくする、言葉を以てする象徴行為であったゆえんが理解されてくるであろう。

もつとも、象徴とか想像力とかを、失地回復のため強調するだけではいっこうらちがあかない。それらはふらふらと独り歩きしているのではなく、生活的・社会的・宗教的に分類された特定の範疇として生きているからである。そしてそれを大胆にとり出してくることこそ、学問の仕事である。さきあげた「葦原」とか「母」とか「産屋」とかいう語にしても、それぞれ現代では失われた古代固有の生活的・社会的・宗教的範疇を背負っているわけで、このことを仲だちにしないかぎり、古代人との対話は成功しない。一方、神話の名においてそこはかとな い情緒的象徴主義がはびこり、ついには人間の理性をもふみにじるに至るのは、神話的なものを素朴に実体化し、神話が象徴行為としていかなる種類の経験にぞくし、いかなる固有の範疇を生きているかを、やはりかえりみようとしないためである。神話の卑俗な、時には喜劇的でさえある現代化が、かくして日程にのぼってくる。

私は古事記を、そのいわゆる潤色とか作為とかをもふくめ、古代人の経験のあらわれとして読んで行きたい。もとより、まだわからぬことが絶望的といいたいくらい多く、文字通り手さ